

盲人のいやし ヨハネによる福音書 9:1-9

1. またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのではなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。(9:1-3)
 - a. 最初の一文からだけでもこれから起こる奇跡的ないやしの前ぶれのような動きが読み取れる。弟子たちと同じくイエスもこの男のことは知らなかったと思われるが、イエスは超自然的にこの男についてのいくつかの事実をわかっていたようである。1) 生まれつき目が見えなかった。2) その原因は罪によるものではなかった。
 - b. 罪と病の関係。多くの文化がそうであるようにユダヤの文化でも神からの罰として悪いことが降りかかると考えられていた。その傾向は聖書の至る所にも見られる。例えばヨブの物語を見ると、ヨブは義人であったが神がサタンに彼を苦しめることを許し、彼の親友も含め周りの誰もがその苦しみは彼の罪の結果だと思った。しかし最後にはそれはヨブの罪によるのではなく、また病気や苦難が来るのは必ずしも誰かが悪い行いをしたからではないということがわかる。いうなれば、病や破滅や死は神からの罰ではなくサタンが私たちを利用して利用するのである。サタンは私たちの罪深さを利用して利用するのである。
 - c. イエスは、この病は罪によるものではなく神の御業が現されるために神が許された（神が行ったのではなく）のだと説明される。私たちの地上でのもっとも大きな功績は私たちを通して現される神の御業に比べたら取るに足らないものであり、おそらく神の御業が現されることが私たちの人生の一番大きな目的となるべきであろう。
2. わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを昼の間に行わなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。わたしが世にいる間、わたしは世の光です。」(9:4-5)
 - a. イエスは超自然的な状況の中でご自身がどのような役割を果たしているかということをとたとえ話的に示唆している。すでにいやしが行われる前から、この男が生まれつきこの状態にあったことやそれは罪によるものではないことをご存知であるなど、超自然的な現象は起きていた。これは知識のことばと呼ばれるもので、神からの啓示によってある人についての事実や情報がわかる能力である。
 - b. ではこのたとえは何を意味しているのだろうか？イエスは昼の間は奇跡を行うことができ日が沈むとできない、ということを行っているわけでない。。ここでの昼と夜が太陽と月でなければどういう意味を持つのだろうか？イエスは11章でのラザロのいやしの前にもこのたとえを使われる。どちらの場合も昼というのは神の啓示を指していると思われる。
 - c. イエスは神の啓示によって誰を、いつ、どのようにいやすかをわかっておられた。したがって、神の業を行うには神の声に敏感であること、昼と夜を識別すること、静寂からの啓示を受けることが求められる。
3. イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。「行って、シロアム（訳して言えば、遣わされた者）の池で洗いなさい。」そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った。(9:6-7)
 - a. イエスが地面につばきをかけたのは神からそのように示されたからである。神と共に歩むには時として勇気や危険を伴う。ここではイエスと男の双方にそれが求められたが、イエスは世の光であるので（いやしの効果は100%）何人かの弟子が持っていた様な不安はなかったであろう。
 - b. このいやしには2つの行動が要求された。まずイエスが男の目に泥を塗ること、これはイエスによる信仰の行い、そしてこの男がシロアムの池に洗いに行くこと、これはいやしを必要とした男による信仰の行いである。神が超自然的な業をなさる際に、まず私たちに行動を求めるのは珍しいことではない。
 - c. 私たちも神との個人的な歩みの中で神の御心を知るだけでなく、神のなさることは益だと期待を持ちながら御心に従うことが大切である。
4. 近所の人たちや、前に彼が物ごいをしていたのを見ていた人たちが言った。「これはすわって物ごいをしていた人ではないか。」ほかの人は、「これはその人だ」と言い、またほかの人は、「そうではない。ただその人に似ているだけだ」と言った。当人は「私がその人です」と言った。(9:8-9)
 - a. この神との驚くべき出会いの結果、神の御業が現された。人々がこの男を認識できなかったのはおそらくあまりにも大きな変化を遂げていたからであろう。